【　話題の提示　】― 漢語への翻訳 ―

1 福沢諭吉は、「society」を、初めの頃はそのまま「ソサエチー」と言っていたのを、「仲間連中」と訳し、これでは馴染まないとして、さらに「社会」という言葉に訳したりしている。またよく知られていることではあるが、「哲学」というのも翻訳語である。この言葉は西周の造語であるが、彼は、「philosophy」を「愛智」、「希哲学」、そして最後に「哲学」という言葉として定着させた。江戸時代や明治時代の医者や思想家、哲学者は、日本にはそれまでなかった新しい概念や考え方を日本に根付かせようとしていた。

2 そのためには、発音をそのまま〈カタカナ〉で書くカタカナ語ではだめだと考えていた。カタカナ語では我が国の文化に異質のものとして残っていくことになってしまう。だが、〈ひらがな〉では深い思想を示すことはできない。この点で、意味を彷彿させる漢語が最も適当であった。

具体

【　話題の展開と意見　】― 〈カタカナ〉の氾濫 ―

3 〈カタカナ〉で原語の発音を書き表すのとは異なる訳語の世界は、たとえば映画のタイトルにしても、つい最近まで行われてきた。テネシー・ウィリアムズの戯曲「A Streetcar Named Desire」を「欲望という名の電車」と訳したり、「An Officer and a Gentleman」を「愛と青春の旅立ち」と訳すなど、いわゆる「邦題」と言われるものだが、こうしたものはまさに名訳と言うにふさわしいものであろう。しかし、最近では、映画にあまり邦題がつけられなくなってきつつある。原題をそのまま〈カタカナ〉で書いたものがほとんどである。BUSそして、たとえ邦題があっても、以前のように名訳のタイトルと思われるようなものは少なくなってきているように思われる。

4 これは、科学技術や哲学、社会学に関する言葉についても同じである。もはや、明治時代までに行われたように漢語に訳されることはまとんどなく、〈カタカナ〉で専門用語が語られる。これでは、初学入門の者に対する敷居は高く、専門家はより専門家になって、他の分野から異なる分野を覗くことさえ難しくなってしまう。

問題意見

5 学問の細分化は大切なことであるが、〈カタカナ〉が増えることで、専門家以外の人にそのおもしろさや重要さが見えてこなくなってしまうのはとても残念なことではないだろうか。

【原因と問題点による補足】― 外来語の多量な流入と言葉の短命 ―

原因

6 外来語が入ってくる量が当時に比べて格段に多いということが最も大きな原因であろう。

7 そして、それに伴って、当時に比べて言葉が持つ命の時間が非常に短くなってしまった。流行言葉は、時代を作っていくものとして重要なものであるが、そのスパンが泡沫のように消えていくとしたら、翻訳に時間を掛けていくこともなくなってしまう。

山口謠司『日本語にとってカタカナとは何か』二〇一二・四

要約例

昔は新しい概念を根付かせるために漢語で翻訳した。最近はどの分野でもカタカナを用いるが、おもしろさや重要さがみえてこなくなるのは残念だ。外来語が多いのが原因だが、言葉が持つ命の時間が短くなってしまった。（一〇〇字）

※要約のポイント ―― 意見は最後にあるとは限らない

今回の文章の中で書き手が言いたいのは、「〈カタカナ〉が増えることで、専門家以外の人にそのおもしろさや重要さが見えてこなくなってしまうのはとても残念なこと」だということです。日本語の文章においては、筆者の意見や主張は文章の終りか、もしくは冒頭に来ることが多いですが、このように文章の途中で述べられることもあります。この文章では、意見を述べた後、その問題の原因を最後に補足的に付け加えています。